

ア
リ
エ
ル
の
王
国



明け方三時ごろ、「ママ、おしっこした」と泣き出した娘を立たせて、パジャマを脱がせる。四日前に熱が出たあと、娘は何度もおねしょを繰り返していたから、寝室には新しいパジャマも替えのシーツもすべて用意してある。濡れたパジャマをシーツにのせて、シーツをぐるりと布団から剥ぐ。

着替えを済ませた娘は私のお布団に移ってきて、「まだ夜？ 朝来た？」と尋ねてくる。「まだ真夜中だから眠ってね。かーちゃん、今日は辺野古へのこに行く」と言うと、「風花も一緒に行く」と娘が言う。「今日は、海に土や砂をいれる日だから、みんなとって怒っているし、ケーサツも怖いかもしれない」と言うと、娘はあっさり、「じやあ、保育園に行く」と言う。

暗闇のなかで、娘は私に「海に土をいれたら、魚は死む？ ヤドカリは死む？」と

尋ねてくる。

「そう、みんな死ぬよ。だから今日はケーサツも怖いかもしれない」

娘の髪をなでながら、ついに一二月一四日が来てしまったと目を閉じる。

辺野古に土砂を投入するための船を発着させる予定の港が、台風で壊れたので使えなくなった。そう発表されてホッとしたのもつかのま、今度は突然、民間の港から土砂投入の船をつけて、海に土砂を投入するという報道があった。せめて今週は辺野古に行けるようにしておこうと思っていたのに、ようやくつくりだしていた時間は娘の発熱であっけなくなくなって、そして土砂投入の朝はいつものようにやってくる。

娘が眠らないので、手足をマッサージしながら歌をうたう。娘を寝かしつけるときは、だいたい「あの町この町」「椰子やしの実」「満月の夜に」の歌を繰り返す。

娘がまだ二歳に満たないころ、「あの町この町 日が暮れる」と歌いかけると、娘は「りゅー」と歌い、それから「お家がだんだん 遠くなる」と歌いかけると、娘は「るー」と歌い、そして「今きた この道 かえりゃんせ」と歌いかけると、やっぱり「せー」と歌った。

あるとき、私が口ずさむ歌はどれも遠くに旅立っていった、もう元の場所には戻ってこないという歌だと気がついた。ただたどしい言葉で歌をうたおうとした娘は、あつというまにひとりで歌をうたうようになっていた。だからやっぱり、娘はあつというまに大きくなって、そしていつか私の前からいなくなる。母親になつてから、私は娘がどこか遠くに旅立っていくその日のことを、繰り返し繰り返し考えるようになった。

眠りに落ちてしまいそうな娘が、「お魚やヤドカリやカメはどこに行く？」と、もう一度私に尋ねてくる。眠りにつく前の娘になにか優しいことを言ってあげたくて、「お魚やヤドカリやカメは、どこか遠くに逃げていきました」と言うと、娘は「アリエルみたいに？」と尋ねてくる。

そう、「リトル・マーメイド」のアリエルみたいに。青い海のどこかに、王妃や姫君が住む美しい王国がある。風花もいつか、王国を探して遠くに行くよ。

*

起きると六時になっている。あわてて支度をすませて、七時には仕事に行く夫とごはんを食べる。「行ってくれてありがとう。怪我だけは気をつけてね」と、出発間際に言われて夫を見送る。

なかなか起きない娘を起こして、朝ごはんを食べさせる。食卓の玄米のおにぎりとほうれん草の炒めものをみた娘は、「玄米のおにぎりなんか大嫌い。風花は白いおにぎりがよかった」と言っさめざめと泣く。

娘の隣に座ってほうれん草を箸でつまんで、「かーちゃんが僕をねらっているよ、僕は風花ちゃんに食べられたい」と、ほうれん草になって声をかける。すぐに娘は泣きやんで、「いいですよ」とせせとごはんを食べはじめた。

それからふたりで家を出る。

最近、保育園までつづく農道を発見したので、途中で車をとめて、ふたりで保育園まで歩いている。高速道路わきの農道と保育園とがつながっている道の途中には、大根とじゃがいもの畑とパイアの苗を育てる農園がある。畑のわきの雨水をためているドラム缶のなかには、まだ冬なのにオタマジャクシが泳いでいる。

いつものように、娘は「おいしくなーれ」とじゃがいもに魔法をかけて、オタマジ

ヤクシの手足がポンと目の前で出てこないか熱心に観察する。

黙り込むと、ふてくされているようにみえる膨らんだ娘の頬を眺めながら、「サンタクローズに何を頼もうか？」と尋ねてみる。「白いおにぎりとアリエルのしっぽ。

風花は海で泳ぐよ」と言われて、今度は私が黙り込む。私はたぶん朝をはじめの前に、どこかで一度、泣いておけばよかったのだ。

保育園に娘を預けてからひとりで農道を歩いて車に戻り、辺野古に向かう。

移動しながらいつも思う。富士五湖に土砂が入れられるとえば、吐き気をもよおすようなこの気持ちが変わるのだろうか？ 湘南の海ならどうだろうか？

普天間の危険除去をうたう「最良の決定」の内実は、普天間直下の我が家から車で一時間とかからない、三七キロ先にある辺野古への基地新設である。それが三鷹と東京湾くらしいの距離でしかないことを知ってもなお、これは沖縄にとって「最良の決定」だとみんなは思うのだろうか？

辺野古の地盤は、マヨネーズのように柔らかい。海底に何十メートルもの杭を打つという、人類が一度も試したこともない工事ができると、みんな本当に思うのだろうか

か？

一〇時に辺野古に到着して、ゲートの前に座りこんでスピーチを聞いていると、キャンプ・シュワブのなかの駐車場に車をとめた警察官に、移動するようにマイクで言われる。沖繩のひとが入れないはずの米軍基地のなかに、警察官や機動隊は車をとめる。かれらは、基地のフェンスの内側からビデオカメラをまわし、座り込んでいる人びとに移動を促し、命令に従わなければ強制的に連れて行く。

それでも今日は、警察官に手足を捕まえられて強制的に移動させられることはないので、やっぱり土砂が投入されるのだとぼんやり思う。空にはヘリコプターが二機飛んでいて、あれは軍機ではなく報道関係のヘリコプターだから、やっぱり土砂が投入されるのだとまた思う。

スピーチを聞きながら座りこんでいると、一時過ぎに、「たったいま、海へ、土砂の投入があったようです」という放送が響きわたる。私の眼の前で泣きだしたひとたちの顔と、空を旋回するヘリコプターが涙でにじむ。「ひどい」とつぶやいたけれど、本当は声をあげて泣きたいと思う。地上で右往左往している私たちではなく、遠くの空の上から、たったいま赤くにこったであろう海を映しているヘリコプターにも

苛立つ。今日の報道は、青い海に土砂が投げ入れられる映像一色になるのだろう。泣きながら立ち尽くしているひとたちは、よろよるとテント前に移動する。

*

移動してからも、いろいろなひとのスピーチは続く。

戦争が終わったあと野ざらしにされていた遺骨を掘り出して、遺族に返す活動を続けているガマフヤー（壕を掘るひと）の具志堅隆松ぐしけんたかまつさんの話は胸を打つ。

「いま、基地になっているあの場所には、戦後、捕虜をいれる収容所がありました。捕虜になってからも、毎日たくさんひとが亡くなり続けました。四〇〇人の方々はまだあそこ、キャンプ・シユワブのあの土の下に眠っています。新しい基地は、その方々の眠る土の上に、今度はコンクリートをかぶせるというものです。僕はそのひとたちをひとり残らず掘り出して、おうちに帰してあげたいんです」

戦場をさまよって捕虜となって生き延びたと思ったのもつかのま、飢えて死んで、死んだその場に埋められて土のなかで骨になって、それでも家に帰ることができないひとたちがあの土の下に眠っている。そのひとたちの死体の上にキャンプ・シュワブはつくられて、そして今度は新しい基地の建設が進められている。

昼食を準備することなく向かったので、一時半にはゲート前から離れる。

途中でスーパーに立ち寄って、あんこの入った甘いパンと夕食の食材を買って、車のなかでパンを食べる。——こういうときだから、毎日やっていることをちゃんとやらないといけない。金曜日の夜は母たちとごはんを食べる約束をしているから、私がいんなのごはんをつくらないといけない。ごはんの前には書評の原稿も書きはじめて、来週の頭には新聞社に送らないといけない。

三時過ぎに自宅に帰り着き、二時間だけと決めて仕事をする。書評を書きはじめたけれど言葉が浮かばず、本を読みかえしていたら結局五時半になってしまい、訪ねてきた母と母のパートナーと一緒にごはんをつくる。六時には娘と夫が帰宅して、みんなで一緒にごはんを食べる。

夕方のニュースではやっぱり辺野古の海への土砂の投入が報道されていて、ごはん

を食べながら、今日の辺野古の様子を少し話す。

娘はまた、「海に土をいれたら、魚はどうなった？」と聞きはじめ、どんなときにも子どもの問いに正直に答えようとする母も、「どうなったかね、魚たちは」と言いよどむ。夫が静かな声で、「みんな、まだ生きているよ。だから工事を止めないといけないね」と娘に話す。娘が「ケーサツは怖かった？」と私に聞くので、「今日はみんな優しいよ。ケーサツのひとも、今日は静かだったよ」と報告する。

そう、今日の警察官はみな静かだった。いつもは立ち止まるだけで歩くように促され、従わないと背中をぐいぐい押される歩道でも、今日は何もされることはなかった。ゲート前で座り込んで聞く、いつもは静止されるスピーチも、今日は一度もとめられなかった。ちょうどそのころ、沖合のあの青い海に、赤い土が落とされた。

*

母たちが帰宅してお風呂に入り、九時ごろ、娘とふたりで寝室に行く。娘は毎晩、眠る前に、「かわいいかわいい風花ちゃん」のお話をせがむ。

「あるところに、かわいいかわいい風花ちゃんという女の子がいました」とお話のはじまりを告げると、保育園のお姉ちゃんたちに「あっちに行つて」といじわるな言葉を言われたことや、保育園のお迎えが遅くなったときにそばにいてくれた先生のことなど、娘はその日に起こった理不尽な出来事をお話に連れてと私にねだる。

お話の最後に登場するのは王妃になった娘で、王妃は「年下の子に意地悪をしたらいけません」と保育園のお姉ちゃんたちを諭し、「チヨコレートをあげましょう」と、お迎えが来るまでそばにいてくれた先生に褒美をさずける。そうしたお話を私から聞くことで、世界は何も壊れていないと安堵して、娘はそれから眠りに落ちる。

今日もまた白い枕カバーに頬をつけた娘に、「あるところに、かわいいかわいい風花ちゃんという女の子がいました」と話し出すと、「風花は、アリエルね。お魚が友達だちで、海に土をいれる魔女をやっつけるっていう話ね。風花はしっぽがあつて、海を泳ぐのが上手つてお話ね。魚とカメとどこまでも行くつていう長い長いお話ね」と言われる。

ねえ、風花。海のなかの王妃や姫君が、あの海にいる魚やカメを、どこか遠くに連

れ出してくれたらいいのにね。赤くにごったあの海を、もう一度青の王国にしてくれ
たらいいのにね。

でもね、風花。大人たちはみんな知っている。護岸に囲まれたあの海で、魚やサン
ゴはゆっくり死に絶えていくしかないことを。卵を孕はらんだウミガメが、擁壁ようへきに阻はまれ
て砂浜にたどりつけずに海のなかを漂うようになることを。私たちがなんど祈っても、
どこからも王妃や姫君が現れてくれなかったことを。だから私たちはひととおり泣い
たら、手にしているものはほんのわずかだと思ひ知らされるあの海に、何度もひとり
で立たなくてはならないことを。そこには同じような思ひのひとが今日もいて、もし
かしたらそれはやっぱり、地上の王国であるのかもしれないことを。

だから、風花。風花もいつか、王国を探して遠くに行くよ。海に向こう、空の彼方、
風花の王国がどこかにあるよ。光る海から来た輝くあなた、どこかでだれかが王妃の
到着を待っているよ。